

受け継いだ想いを力に、毛筆文化を守る 筆一本から始まる、秋田と全国を繋ぐ新たな文化の形



尾形 翔平

有限会社 書友社
〒010-0954
秋田市山王沼田町11-11
TEL 018-862-3484
FAX 018-862-3485
<https://www.shoyusha.com>



HP

書道を誰もが気軽に 未経験の視点から業界に挑む

戦後、秋田県内の教員たちが「毛筆文化を守り育てよう」との思いから創刊したのが、月刊競書誌「書友」だ。有限会社書友社は1970年に設立され、書友の発行を企業体として引き継ぎ今に至る。近年は人口減と手書き離れにより、書友の購読者数も下降傾向。創業者の孫にあたる尾形翔平さんは、前職の銀行員や商工会職員時代に県内企業の支援を行うなかで、このままでは先細っていく自身の家業に対しても「何かもっとできることはないか」という思いが大きくなり、2022年から家業に携わるようになった。

書道に深く触れてこなかったという尾形さんだが、その「未経験者の目線」こそが強みとなっている。「流派や経験を問わず、誰もが楽しめる場を作りたい」と、2023年に書友創刊70周年事業として「書友展」を企画した。半紙1枚で簡単に応募ができ、全作品を展示する仕組みが反響を呼び、県内外から1,300点近い作品が集まった。一見、難解で敬遠されがちな書の世界だが、誰もが気軽に書を楽しめる環境を作るべく、尾形さんは奮闘中だ。



初年度は1,300点だったが、翌年は1,800点、昨年は2,000点を超える作品が集まった。展示会場の様子は圧巻だ。



県内外の書道教室経由のほか、個人で購読している方から直接届く課題作品を確認している様子。

異業種との共創で 観光や地域資源に新たな価値を

尾形さんは以前の職場で培った縁を活かし、毛筆と地域資源を掛け合わせた企画を打ち出している。2024年には五城目町の福祿寿酒造と連携して銘柄名を書友展の課題としたタイアップを実施し、最優秀作品は、同銘柄の限定ラベルとなり、受賞者に記念品として進呈した。この企画はSNSや口コミで拡散され、日本酒愛好家の間でも大きな反響を呼んだ。書友展への出品・展示をきっかけに県外から秋田へ足を運ぶ人も増えており、観光振興や「関係人口の創出」という面でも大きな期待を集めている。

また、書友の誌面づくりでは「学び直し」のハードルを下げる工夫も凝らしている。上級者向けの課題だけでなく、初心者でも取り組みやすい平易な課題を新たに設けたことで、ブランクのある大人が再び書道に親しむきっかけを作った。「手書きの機会は減っているが、書で表現したい潜在層は必ずいる」と力強く語る尾形さん。伝統に新風を吹き込む若き跡継ぎの挑戦に、今後も注目していきたい。



福祿寿酒造とのタイアップでは銘柄名「一白水成」を課題に。見事最優秀賞に輝き、一白水成限定ラベルとなった作品。